

御旅所として毎年九月の祭禮には非常に賑つた所であつた、而して此時にはいつも芝居をして一般のものが楽しんで居つたのである、其後不完全な劇場が建築されて毎年二回いはゞ年中行事として春秋に行はれ、明治の初年頃迄専ら山口惣七が經營して居た。當時の芝居は多く人形芝居で、傳次郎とか源之丞とか云ふ一座で、三百石以上の帆前船で乗り込んだものだ。此劇場は明治十六七年頃まであつたが土地の不便なものと小屋の荒廢したのとで追手通舊山崎屋敷の跡に建てた。間もなく舊乙區積立金で其隣地に新築したのが目下の融通座の前身で當時之れを常舞臺と云つて其宏大に驚いたものである。後これが町有となり大正四年に新らしく改造をしたけれども斯るものは自治團の持つ可きものでないとの理由の下に拂下げ、今では株式組織となつて居る。其他鶴島町に舊福井座を移轉し共樂座と改稱したものである。由來宇和島は興行地として片田舎の割合に玄人仲間の問題にされて居るので、先年雁次郎一座を迎へた際にも當時大阪にさへない高價な木戸錢を取り相當な入りがあつた。田舎に似合はぬ大きな小屋だと成駒家が驚いて居たさうである。

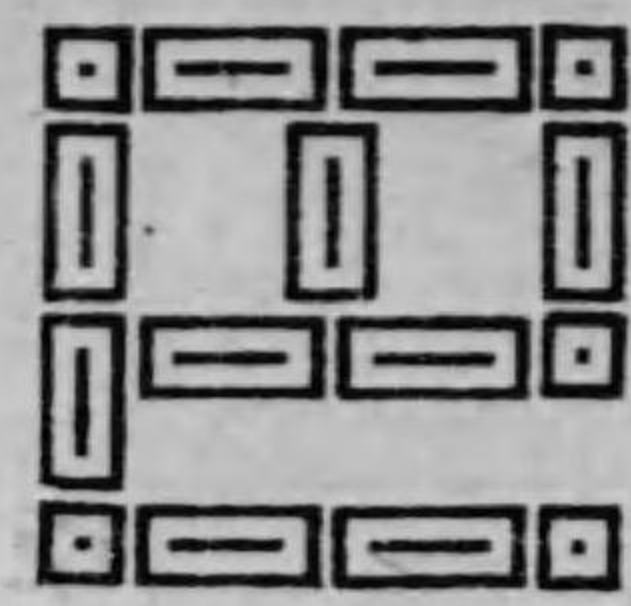
活動の常設館としては丸之内に鶴島館がある、大正五年の創立でセセッション式の誠に氣持のいゝ建築である。現在は日活との共同經營であつて、土地には不相應な新らしい映畫が提供せられ、毎夜満員の盛況を呈して居る。近々川端方面にも大正館と云ふ常設館が出来るさうで既に設計に取り掛つて居る。

### 花柳界

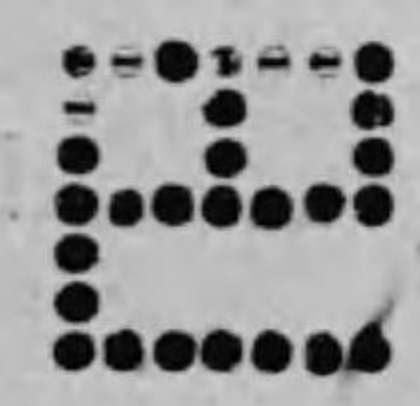
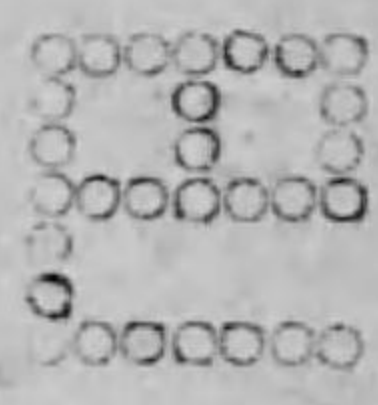
花柳界 如何なるものを問はず、其沿革由來を研究して見ると實に面白いものであるが宇和島に於ける花柳界の變遷史も亦確に興味をそゝるものゝ一つである。之れを案するに僻遠なる伊豫の南端に、而かも山岳重疊として平野の少ない此地方は何で出す可き産物があらう、知行の十萬石は單に名のみであつて、僅かに海産物によつて之れを填めてゐたと云ふ事である。況んや前封富田信濃守が暴政の下に塗炭の苦を受けた此地方民は心骨に徹する貧窮に陥つた爲め、伊達家代々の君主は勤儉質素を唱導して治政の根本とせられたものであつた。此意味に於て我々父祖の頃までは五節句と祭禮位を除くの外、



平素酒や御馳走を口にする事は稀であつたらう。従つて吉原島原などに於けるやうな折花攀柳の粹は夢にだも見る事が出来なかつた。之れが星移り物變り、世は麻の如く亂れた丁度幕末文久元治の頃であつたらう、御門外なる向新町の石橋の下に、入熊と云ふ鰻屋が出来た。其處には吉田生れとかの通稱歌常と云ふ男藝者とても名づくべきものが入をしてゐた。鰻料理に一盞を傾けるものが、一人殖へ二人増すに従つて、この藝者も亦段々と呼び手が多くなつた。之れが抑々宇和島に於ける料理屋の開祖で今日の花柳界を形作つた基といつてもよろしいのであらう。間もなく大阪から流れ込んだ鶴吉と云ふ淨瑠璃語りがあつた。痘痕はあれど、中々の愛嬌もので、いつも酒席を取持つてゐた。此時始めて、泉州は堺の濱から花友と云ふ酒が下つて来て、従來飽のやうにべたついて随分悪酔ひのする地酒に親しんでゐたものも、其芳醇なる味に何れも舌鼓を打つて喜んだ。その後下り酒を総稱して花友の名が喧傳されるやうになつた。暫くたつて新榮橋の詰に、八源の看板を掲げて、三四人の怪げな酌婦を置いたものがあつた。之れは和靈様に參詣する土佐人を相手にしてゐたやうだ。其内に味酒屋萬吉が本町橋に、大阪から三



御寫眞



美術撮影



町本島和宇

軒芳衆巴

番八二三話電

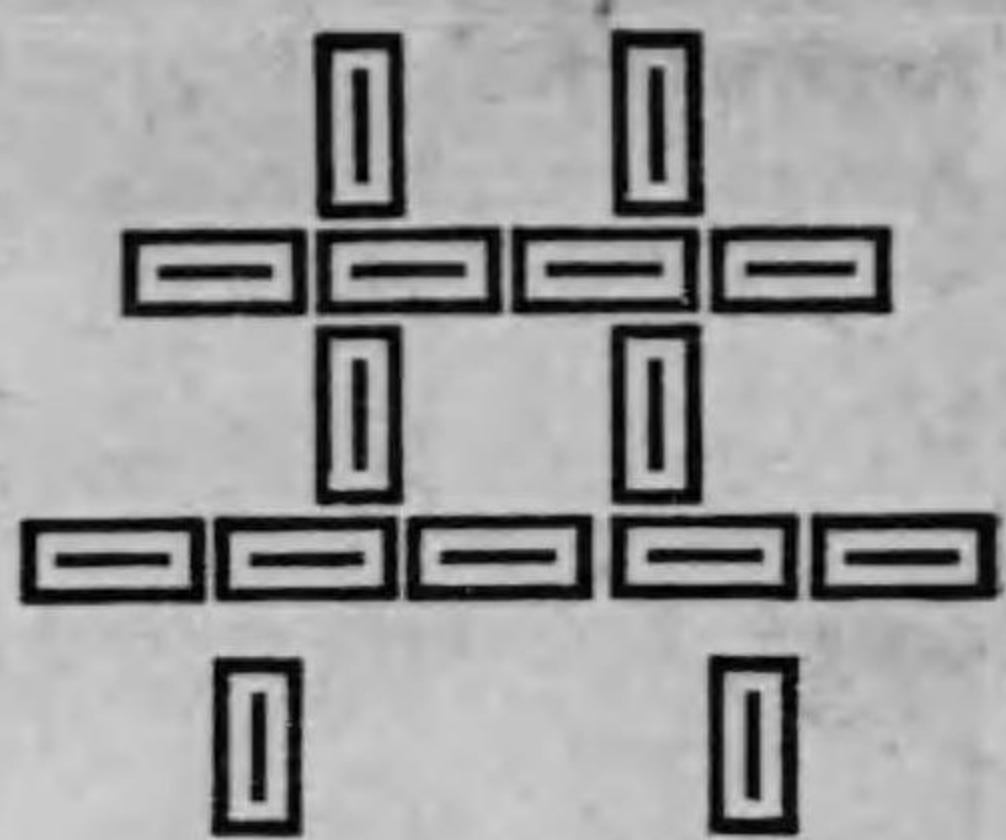


罐詰

各種製造

宇和島丸之内御濱

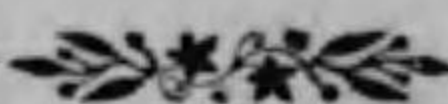
宇和島畜産株式会社



宇和島劇場株式会社

共樂座

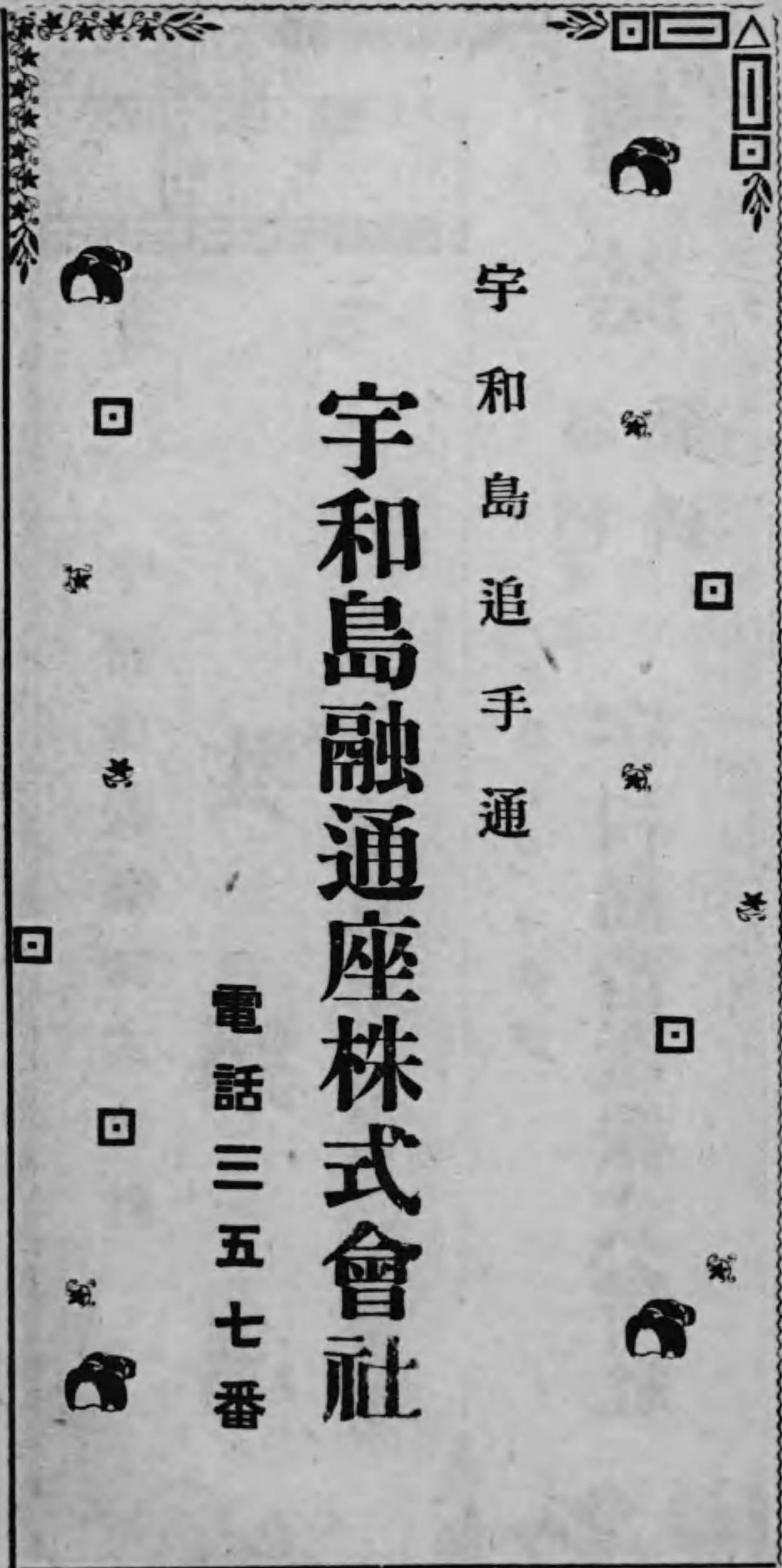
鶴島町 電話三四九番



宇和島追手通

宇和島融通座株式会社

電話三五七番





宇和島龍光院下

# 北宇和郡畜産組合

電話一三九番

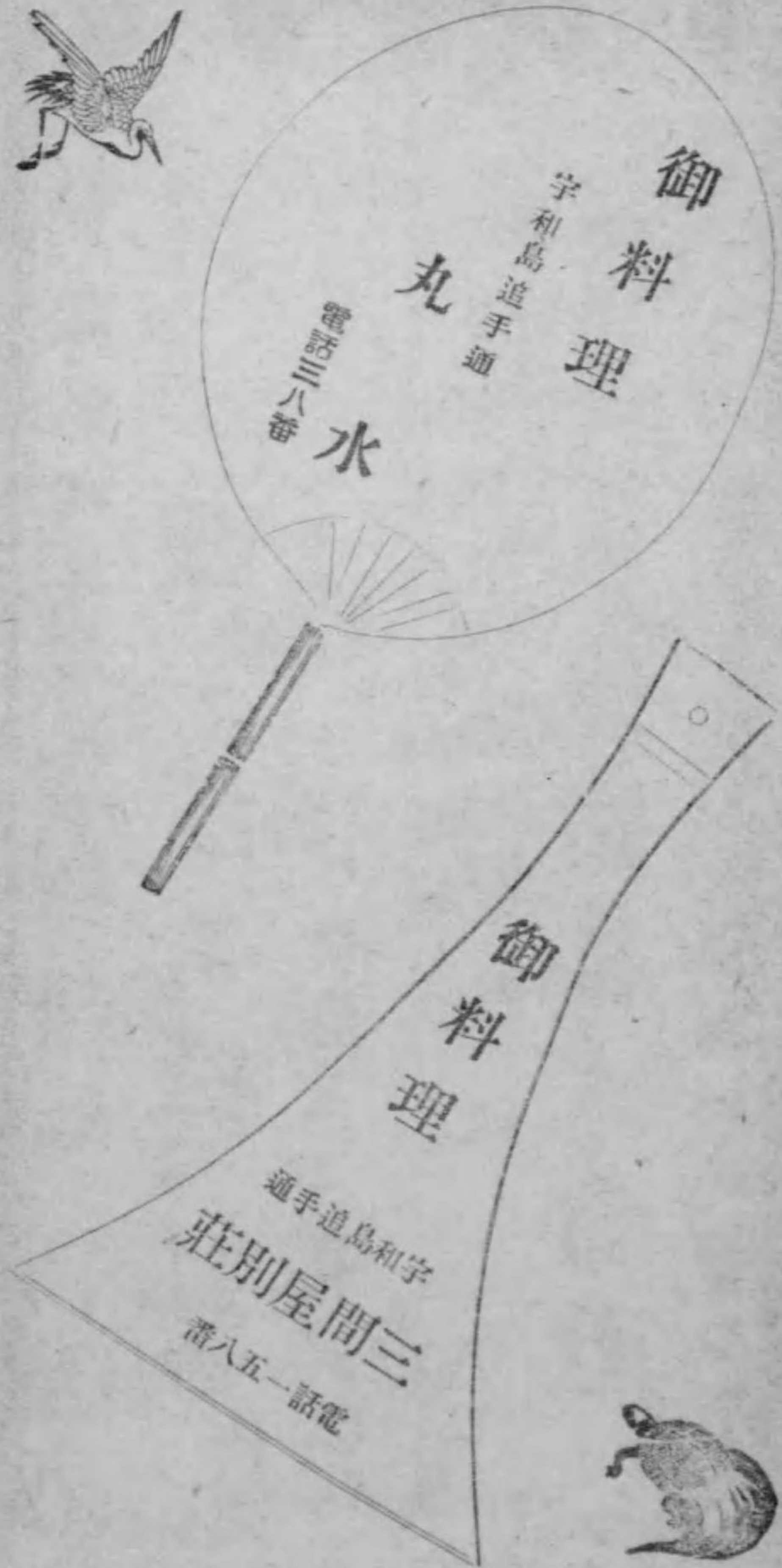
宇和島町藝妓及置屋同業組合  
宇和島町料理營業組合

宇和島袋町濱通

# 内町檢番

電話 八七番  
二一五番





宇和島北新地

藤江檢番

電話三〇二番

宇和島北新地

本檢番株式會社

電話六一番



御料理

宇和島丸之内

大吉棲

電話一八番

御料理

和靈神社北籠

玉川棲

電話一八四番

割烹

宇和島追手通

白水軒

電話二四二番

御料理

宇和島横新町

此梅

電話二九九番

人の女を抱へて来て、始めて置屋を開いた。何にしる僻陬の地に大阪下んだりから仇つ  
 ぼい姐さんが表はれたので、宇和島の小天地は爲に、湧きかへるばかりの評判で、之れ  
 が爲めに資産を蕩盡したのも、其處此處に出来たやうだつた。此中にお辰と云ふ美人  
 がゐるが、引く手数多の其間に遂に福井利三郎氏が手活けの花となつた。續いて淡路屋  
 の勝ッさんが負けず劣らず、之れも若駒を根引きしたことは、今猶残つた噂さの種で、  
 當時好一對のコントラストであつた。此時又向新町の黒澤借家に、『いろは』が開業をし  
 た、茲に面白いのは舊藩士の前田開山が長崎から歸つて来て料理屋を開き、豚屋と云つ  
 たことである。其處の居候に遠州掛川から流浪して来た林義三郎と云ふ面白い男があつ  
 た。『みいお婆やん』なるものど一所になつて、川端に料理屋を初めた。之れが玉林亭の  
 前身である、丁度之と前後して、當時大參事をしてゐた成田氏が何を感じたか此榮職を  
 弊履の如くに投げ捨て、物もあらうに須賀川土堤の大榎の傍に料亭を新築し、わざと、  
 大阪から、おゑん、お梅といふ二人の仲居を呼んで来た。此時分の須賀川土堤は人家な  
 どは一軒もなく、草茫々として狐狸の蹂躪に任じてゐた有様、月の夕雪の且には雅人墨



客の杖を曳くものゝ外、殆ど立寄るものはなかつたのであつた。然るに此の料亭が開かれると、舊藩中の誰もくが、當時貰つたばかりの奉遷金を懐にして、敢て此の須賀川土堤を遠しとせず、盛に通つたものである。阿部某の如きは、圓札を燭臺に刺し通して蠟燭の燃え落ちるまで置くのだと豪語したなど、驕奢を極めた面影が今に夢物語りのやうに残つてゐる。當時巷間に左の如き俗謡が流行した。

成田通ひすりや、雪が降りかゝる

戻りや妻子が泣きすがる

其の後五六軒下に須藤頼明氏が蒸汽宿を兼ねて開業したが間もなく疊んだ、之れと前後して方角違ひの堀端裾の松根の屋敷に吉源と朝日庵とが出来た、さうして又笹安、扇亭なども現はれた、此の扇亭に野川生れの他處戻りでよしのと云ふ別嬪がゐて、随分と鼻毛を抜かれた連中もあつたことだ、當時の豪遊連は郡長の都築氏を筆頭に淺井警部、其他三島の舊里正斯波氏等で、何れも五指の中に入つてゐた。都築郡長が扇亭の二階で、八幡濱人二宮某をブン撲つて事件を惹起したのも此時で、其の勢猛烈にして當る可から

ざる有様であつた。以上は明治の初年から西南戦争迄での事で宇和島花柳變遷史の第一期とでも云へやう。

それより少し降つて更科、雪輪、玉川、浪花亭等の料理屋が次第に増し、藝者も亦大阪から切りに輸入された。就中小鶴、入熊のお梶、玉川のお梅、紀の國屋の一龍、浪花亭の梅龍などは、何れも嬌名を語はれ、各凄腕を振つて當時の遊冶郎を惱殺してゐた。さて其時分の遊興費は何程か、つたかつたかと云ふに、之れ亦虚のやうな話、一夕能く六七十錢もあればいゝ、旦那として、優遇款待せられたさうである、其後西本氏の全盛時代となり、續いて赤松氏の豪遊期に移り此間に三間屋興り、石崎庄吉氏丸水を新築し、大吉樓馬關から歸つて開業と云ふ順序となつて、茲に宇和島の花柳界は第二期を終つて今日の隆盛を來たしたのである、今でこそ少し立派な宴會をみると、一人優に十圓もかゝれど、明治二十年前後にあつては懇親會と云へば會費十錢位で、會場はいつも淨満寺、養蠶傳習所などであつた、少し降つて二十五年頃でも、まだ十五錢内外で、二十錢と云ふ會費は殆どなく、夫れでも各自陶然として酔ひ、満足をして歸つたものであつた、郡の



首席書記加藤氏が三間屋の宴席に於て誤つて負傷し、遂に死因となつたのは確か此時であつたと思はれる、明治二十六年に公會堂が建築せられ、凡て大宴會は此處に催されることになつた。普通の宴會でも、七十錢の會費で相當にやつて居たのは、つい五六年前の事で、今日如何に少なくとも三圓以下では逆も、やりきれなくなつたとは、世の中も變れば變るものである。藝者の線香代なども、すつと初めは一定のものはなく、明治十四五年頃に一本四錢と定めた、其後段々と上つて、日清戰爭頃は一詰八十錢であつた。それから一本十錢となり、十二錢、十五錢、十八錢、二十錢と進み、永らく一詰が壹圓八十錢を保つて居たのはまだ三年前の事であつた。それか今日では一時九十錢となつたが、これでも御當人決して喜んで居ないさうだ。現在の料理屋では、丸水、大吉樓、三間屋、白水此梅、雷、丸八位が代表的のもので、此の内、丸水は座敷は廣し設備はよし、何と云つても一流である、三間屋は低廉なる點で一般の氣受がよく、大吉樓は料理に好評を得て、粹客の絶へ間がない。白水と此梅は一は東に一は西の端に位し、純大阪式を發揮して折花攀柳には最も相應しい。殊に白水は主人公が趣味の人で、一度會へば春風に接

するやうだ。雷、丸八敢て堂々たる宴會には適しないが、若し夫れ四疊半裡互に淺酌低唱の一宵を過すには最も氣のきいたよい處である。其他猶數軒の割烹店が散在してゐるが、何れも話頭に上る程のものでない。是等の料亭に出入する藝者は俗に内町藝妓と云つて、一番高く止まつて御座る。川端藝妓が現はれて以來は兎角手ツ取り早い方が此方面に吸収せられて、今日僅かに三十名に足りない程に減つたけれど以前は百二十名もあつて、素晴らしい勢であつた、これらは何れも大阪仕込みで土地ツ妓が一人も居ないのは不思議なやうだ、今でこそ是れはツ……とこの足を踏む赤切符も交つて居るが、百名以上も居た時分にはこんな片田舎にこんな妓がと都人士を驚かした事もあつたものだ。聞く所によれば大阪以西に於て、最も大金を張り込む處は馬關と博多とこの宇和島ださうだ。それゆへ大阪邊では同じ田舎廻りでも、宇和島行きは比較的歓迎せられて、一種好奇心が動くといふ、併しいよ／＼來て見ると二度喫驚するものもないではないやうだ。昨年までは四軒の置屋があつて、個々獨立の營業をして居たが何につけ不便が多いので合同して檢番制度に改革した、之も時代に順應したとでもいふのだらう。



宇和島花柳界の第三期を代表するものは川端藝者である、内町藝者が三十未滿の貧弱なるに比して、此處は驚く勿れ百四十名の多數を占めて居る、川端藝者の隆盛は宇和島發展の先驅で、恰もユニオンジャックの旗が英國の領土擴張の先頭に立つたと同じ意味の偉力を表はして居ると云つてよいのである、斯る大多數であるから、所謂十把一東で、中には裏表の分らぬのもあるさうだ。併しながら近來素敵な優物を輸入して、或ものはその藝と云ひ、その手腕と云ひ内町藝者などは跣足なのもある。内町が専ら輸入地を大阪方面にして居るに引き換へ、川端藝者は多く高松廣島産で間々地下の種を交へて居る以前は山奥の百姓さんが、川端の柳の木に馬を繋いで、土瓶酒でちよつと一二時間遊んだものだが、今では客種も大分に違つて来て内町方面からお忍びと云ふものもある。一昨年縣令を以て、鶴島町及び東川端に散在して居る料亭を一廓に集め風教上の取締を勵行する事となり、同時に和靈下なる藤江の地に川端遊廓を作り、大厦高樓軒を並べ道路の中央には櫻樹を植ゐるなど、恰も新吉原の中の町に髣髴たるものがある。斯くして百四十名の藝妓は毎夜箱切れの盛況を呈して居る。目下本檢番と新檢番の二個處が對立の姿

で、非常な勢力を有して此方面を左右して居るが、之は早晚合同す可きものであらう。數十軒の料理屋の中では随分如何はしいものもあるが、菊の家、玉川樓、松川樓等は内部の設備も相當に出来、板場の腕も可成りに冴えて、内町に敢て遜色がない。何にしる今年始めて賦課する遊興税でも、三萬五千圓の豫算を計上して居る有様で、眞にご豪らゐものだ。宇和島が北へくと發展するに反して、南方はどうやら閑却されさうになつた。之が挽回策の一方法でもあらうか、此四五年前から元結掛藝者なるものが現はれた、今之を汽車の切符にたとへ内町を白とすれば、川端は青で元結掛は遺憾ながら赤切符となせばならぬ、事程さやうに劣等である。客筋は三浦を中心とする海岸部と、接續の來村と清滿方面のお百姓で、彼等は汗水を流して得た養蠶の金を、此處に來つて湯水のやうに消費するのである。汗水と湯水ごうせ水が水に還元するのだから不思議はない。元結掛藝者が出来てからこの方、來村の若衆は肥桶や割木を擔いで濱の丁を通るものになくなつたとやら、誠に寒心に堪えないことで、之れ等はが淳朴なる農村に及ぼす弊害の大なるものであらう。



## 年中行事

一月 別に之と云ふ特徴はないが、元旦には公會堂に於て官民合同の名刺交換會がある。夫にも拘はらず此處に集まつたものゝ中にてやつぱり各戸に廻禮する人あるは矛盾である。特に奇異に感ずるのはこの地に未だ新曆と舊曆との二度の正月が行はれて居ることである。併し既に大正の今日なほ斯る舊曆の脱せないのは一面に於て萬止むを得ない事情もある。即ち農村漁村を相手として存在する我が宇和島は或場合その得意なる彼等人々の爲に左右せらるゝことあるは止むを得ざることである。併し官公吏を始とし所謂智識階級に屬する多數の者は何れも新曆を用ひ、農家と一部の商家並びに工場を有する人々のみ舊正月に休業する、かゝる點は何とかして改革せねばなるまい。現に多數の女工を有する製絲織布工場の如きは女工自身が七日後ならざれば歸つて就業しないといふこの一事だけは労働者に於て絶對權を有つともいふべきか。

二月 宇和島の節分は一寸變つて居る、煎つた白大豆をば一々その家内中の年の數に

合せて紙に包み最寄の十字街頭に立ちて投げ捨てる、捨るや否や必ず後を見ずして歸宅する。この風今猶一部に行はれてゐる。近來花柳界には大阪邊の風俗を眞似て變裝するものあれど、只單に一部少數のものに止まる。

初午 舊曆の初午は三里を隔たつた三間のお稻荷さんが非常な賑ひで、歸りには必ず松茸と瓢箪の菓子を下げて歸ることになつて居る、當地でも妙典寺境内のお稻荷さんは近來年と共に賑ふ様だ。

三月 雛節句、新曆の方には何等記するものがないけれども、雛節句は舊曆を用ひ、凡て業を休んで此の長閑なる一日を野に山に將た海に所々三春の行樂を恣にする。潮音寺山、愛宕公園は滿山人を以て埋れる有様にて非常な賑である。而して十二三才以下の子供は男女を問はず、行厨を携へ、雛段の前にて會食し嬉々として樂む習ひ、これは古來から傳はつて今猶盛に行はれて居る。

四月 舊曆の八日は御釋迦さんの誕生日で、灌佛會を行ふ、此日各寺院では美々しく草花を飾つて釋尊の像を祭る、子供達は甘茶のほしさに先きを争つて寺々に集まるさま



今も昔も變ることなし。

**五月** 天救園の藤 伊達家は毎年五月の初旬に一週間天救園を開放し、公衆の從覽を許される。丁度藤花満開の時期で、三々五々新緑の下に毛氈を布いて飲めや謠へで樂み合ふ、弦歌の聲は園内に響き渡つて頗る賑かである。

端午の節句 端午の節句も舊曆を用ゐる、初節句の家では盛に祝ひをなすものもある、幟や人形は別に變つたものもなければ、この地は一般鯉幟が多く農漁村になると武者繪を描いた豎幟が風に翻るのが多い、何となく景氣のよい感じがする。

**七月** 夏祭ある月である、丁度都會に於ける縁日の賑に等しいもので、此月の間に宇和島に於ける各神社の夏祭が行はれる。夜間涼みがてらに出て來る參詣者で非常に雑踏する。なほ舊曆の七月に七夕と盆をがある。

七夕節句 徳川時代行はれた昔そのまゝの遺習を傳へて居る。各戸には今年笹に五色の短冊を下げ、清淨な水、新鮮な野菜、そしてそれに所謂しば餅をそろへて、遙か天上の牽牛織女の両星に手向ける。この夜十二三才を頭に男女の小供が紅提灯を點して宵暗

の町を徘徊する様床しいともゆかし。

**孟蘭盆會**、この地の盆は長崎と似て居るさうだ。併し両者の關係の如何なるやは全く不明である。思ふに全國中でも最も振つた特徴のあるものといふべきであらう。宇和島の墓地は他國のそれに比して、立派でそして整頓して居るのは確かな事實である。之を善意に解すれば祖先崇拜の美風が涵養されてある事になる。孟蘭盆の日、初盆の家では十三日から三日間、毎夜其墓前に奉燈する。しかのみならず親戚故舊がそれ／＼燈籠や岐阜提灯を贈り、その數多きは數十個に達し、日頃寂寞たる墓地もこの時のみは燈火と人影にみだされて賑しい。殊に三方に山を負ひ、その山麓は墓地を以て圍まれて居る宇和島は恰もイルミネーションで飾つたやうに、時ならぬ美觀と呈する。

**盆踊** 猶茲に特筆したいのは盆踊である。この盆踊は全國到る處に行はれて而も悉く多少の相違がある。

宇和島の盆踊は左程奇抜といふ程のものではないが、古來より漁村農村に於ては庶民唯一の娛樂として盛に行はれて居たものだ。古老の話によれば維新前には附近の村落から



特に宇和島に浮かれ出て競争的に各所で踊つたものださうな。鳴物は大鼓だけで至つて  
單調である。最も戸島念佛と云つて鐘大鼓で賑かに囃し立てるものもあるが近來宇和島  
には見ることが出来ない。音頭唄は方言にクトキといつて踊のシンフルなるに比して確  
に勝つて居る。その音律に悲哀の調と帯びて居る處は盆唄としては如何にも相應しい。  
若し夫れ月色澄み星斗流るゝの夜、太鼓の遠音と共に海を渡り山に響きて遙に『ヨ―ホ  
イ―』の餘韻を耳にする時、何となく一種の神秘を感じ詩的情緒に絆される。

**十月** 氏神祭 此月は地方人士の安樂月である、不斷の苦心勤勞をも全く打忘れて互  
に相樂しむさま、眞に撃壤鼓腹の觀がある。敬神と云ふ日本固有の美風を祖先より繼承  
した吾々、殊に植物性の食物によつて存在し來つた日本人がこの五穀豐熟の秋にあたり  
祖先崇拜の意味に於てその産土神の祭禮を行ふとは眞に意義ある行事といふべきである  
現今如何に宇和島が發展したとはいへ、東京や大阪に比較すると尙天地霄壤の差がある  
平常粗衣粗食に甘んじて居る地方人は此の祭禮の御馳走をどんなに楽しみに待ちも上げ  
て居るであらうか。而かも年々歳々千遍一律で、曰く調の活け盛り、曰く盛り合せ、曰

く鯛麵、曰く酢漬け、曰く丸壽司、曰くソボロ蒟蒻、曰く牛、甚だしきに至つては、芋  
の煮轉まである。退いて勝手に廻れば栗入りの赤飯に、五日壽司、少し田舎臭く（宇和  
島にて）なると甘酒の用意がある。之によつて舌鼓を打ち陶然として酔ひ樂むさまこれ  
亦太平の象として喜ぶべきである。

牛鬼と鹿の子 宇和島を中心としてこの月に舉行せらるゝ神社の祭禮は、五日の八幡  
神社を振り出しに、十五日は三島神社、宇和津彦神社の二十九日を最後とする。これ等  
神社の祭禮には遼物といつて、この祭典を賑はす爲めの餘興的催しがある。何れの祭も  
大同小異ではあるが、中に就いて彼の牛鬼と鹿の子とは、他に類のない地方特有のもの  
であらう。前者を男性的表現とすれば後者は女性的のものとして對照が出来よう。牛鬼  
は長さ三間、高さ一間餘、幅一間半の竹籠を組み、棕梠毛又は赤布を覆ひ、數十の若者、中  
に入つてこれを擔ぎ、鬼に擬した首をば打振りく猛進する。そして後よりはブーく  
竹貝を鳴らしつゝ少年の尾行するさま一見蠻風を帯びて居るとはいへ、如何にも勇まし  
い觀がある。昔加藤清正が朝鮮征伐の當時使用したものだといふもあれど、何時如何な



る時期に傳へられたるや全く不明である。鹿の子は舊藩政時代に藩士堀江某の考案に成れるもので何處までも優美なものだ。嘗て二十餘年前宇和青年大會の當時東京で之を演じ大喝采を博したことがあつた。

十一月、十五日鶴島神社大祭、之が地方に於ける掉尾の祭禮である。當日は境内で有志の奉納相撲がある。相撲は實際此の近郷にない盛況で、近來は中學生も力瘤を入れて來て、年々盛になつて來る。

### 名所舊跡

**鶴嶋城** 宇和島から鶴嶋城を取り去つたならば、この地は殺風景な市街になつて終うであらふ、と言はるゝだけ、夫れだけ鶴嶋城は宇和島を美化して居る。

寛文年間の築造であるから、今を距ること凡二百六十餘年前のものである。舊外堀内部の諸々の建物は、廢藩置縣の大嵐に浚はれてしまつて、今は唯僅に追手門の一棟と天守閣とを残すのみではあるけれども、一度登山すれば、有りし昔の面影を偲ぶべき幾多

の石垣礎石の現存するのを見る事が出来るのと、天守閣内に掲げられたる春山、宗城兩公の英姿に接することゝは、確に土産話の一つとなるであらう。と同時に第三層の窓から見渡した四邊の風物も旅情を慰するの材料であらう。

**天救園** 鶴嶋城を下ると、其麓に藩祖秀宗を初め村候、宗紀、宗城諸公を奉祀したる縣社鶴嶋神社がある、其神苑を経て南すれば、舊藩邸庭園の一部なる天救園に行くことが出来る。規模廣大ではないけれども、深緑の樹木、清新の芝生、珍奇の藤花艶麗の菖蒲花と幽邃の園池、季節々々の眺は地方唯一のものである。毎年藤花の季節と菖蒲花の季節とは公開して一般の遊覽を隨意ならしむる。

**佛海寺** 天救園を見たものは柳森神苑へ行く途としては少しく廻り路とはなるけれども佛海寺に立ち寄る必要があらう、と言ふのは、此の寺は勅によつて大用國師といふ諡號を賜はつた誠拙和尚の出身寺であるからである。寺内には同師關係の古文書類も彼是保存せられてあるばかりでなく、師の關係せられた羅漢は第五世藩主村候の時代に鎌倉から送られたもので、彫刻としても逸品といふことである。考古者、藝術趣味者は此れ等



を一見するも宜しからうと思ふ。庭内の大松は龍華山等覺寺の老松と共に有名であり、奇しき傳説をも以て居る。何は兎もあれ、庭内を見廻り、而して本堂に上つて見るが宜しい、たしかにお土産話の數々を得らるゝこと疑ふべからずである。

**榊森神社** 城東、縣社宇和津彦神社の境内を縦に通りぬけて登山すれば、所謂榊森神社である。『天狗さんのお留り木だ』と迷信家が言ひ傳へて來た古杉の下の立つて四顧すれば、宇和島市街の殆んど全部が容易く見渡さるるばかりでなく、來村の田圃、九島の甘藷畑は言はずもがな、正面遙に汽笛を擧げて入港する汽船や、昔ながらの帆船漁舟の徂來するの、手にとる様に見えることが出来る。是非試みねばならぬ登山であらう。

**金剛山大隆寺** 之れは天正十二年富田信濃守信高の創建した古刹で、幕末勤王の名僧にして禪林の偉材であつた晦巖禪師の居た寺である。榊森神社を下るものは僅々一町足らずも歩けば其山門をくぐる事が出来るのである。

別に記する所の龍華山壽覺寺と共に舊藩主の菩提寺で、村候、宗紀兩公の墓所がある。寺内書院に坐して、雅趣に富める庭園や、古く藏する幾多の寶物類に觸るゝも面白からう。

山門を出で、左に折るれば、新しく拵へられたる苑池を前にして、山家清兵衛公頼の靈屋に詣ぶることが出来る。

**龍華山等覺寺** 大隆寺を辭し、大字鋸町を下り切らないで右折すれば、等覺寺の山門が直ぐ行く手に見ゆる。高く聳ゆる老松は三四百年の齡を重ねて一點の痛みなく稀有の完全な大樹である。寺は元和四年の創建で、大隆寺に比すれば稍新しいけれども亦古刹の一である。

藩祖の廟もあれば、藩祖に殉死したる家老神尾勘解由外三名の墓地もあり、更に宗利宗胤、村年、村壽、宗城等歴代藩主の廟は古色蒼然たる樹木の間で嚴として存して居る許されて參拜するも宜かしらう。

天保年間、勅によりて明鑑弘照禪師の諡號を賜つた名僧杭州の西江寺は、山門より小河に沿ふて下ること二町許の處に在る。

**臨海山壽福寺** 龍光院 西江寺から更にくゞ小河に沿ふて下れば、聽て右手の石段を上つて四國靈場四十番の奥の院なる龍光院（壽福寺といつては知られない……龍光院でな



くては)に詣づることが出来る。年が年中参拜者の絶わ間ないのは勿論のことであるが遊覧案内の筆が此處に動いて来たのは『奥の院』なるが故ではない。即ち宇和島を見やうとする人の爲には、榊森神苑で見られない好圖面が此處……境内或は階段のあたりに擴げられてあるからである……城山の縁を此處で見ると一段の美はしさを加へる。榊崎の山の端を隔てて九島山或は宇和島灣頭を眺めた氣分は言はずもかな、西へくと發展して行く宇和島の現状も此處に立たねば説明が出来ない。大字袋町の濱(内港)から沖へくと發展せんとする將來の大字和島も此處で勘考すれば篤と合點が行く、靈的の頭を有する人も、物的の頭を有する人も、共に一度は来て見るがよろしい。

**和靈神社** 宇和島へ来て和靈神社に参拜せぬでは、宇和島に來たとは言はれまい。龍光院を下つて新市街鶴島町を縦に須賀川畔に出づれば、和靈神社は眼の前に見へる。御幸橋を渡つて一の鳥居をくぐるを順路とせねばなるまい。神社の由緒は書くだけ野暮である。参詣して神靈、神威の彌々益々高く隆きを拜するがよろしい。

**住吉山** 宇和島を奥から見るには榊森神苑、横から見るには龍光院、表から見るにはど

うしても此の住吉山に上らねばなるまい。此の三ヶ所は宇和島を大觀すべき三場所と言つておく。

しかのみならず、振り返つて此の山上から宇和島灣、九島山を眺めた景色は、城山中にして右と左、而して正面を見渡した景色と共に確にカンパスのものである。

**宇和嶋灣** 斯う案内してくると、今度は海へ……船に乗らなくてはなるまい。榊崎附近の景色の海上からの眺め、之を第一として、右に大浦玉ヶ月の入海を見、悠長な櫓の音と共に變り行く右岸の景色を見送りつゝ、岨岩に釣を垂れ、これから灣を横ぎつて九島に渡り、願成寺庵附近から海岸に沿ふて蛤浦に出で、更に百ノ浦、本九島、而して小高島、堂崎を経て、石應、白濱の海岸を縫ひ、戎が鼻を廻つて内港に向ふならば所謂千變萬化の自然の景色、たしかに一日の清遊として最も佳なるものであらう。

**其他の遊覽地** 市街を離れ、海を離れて山を選ばんとするものは、近く來村薬師溪に於ける數多の瀧、山水の景色或は八幡村鮎返りの瀧を訪ふべく、遠くは毛山を登り鬼が城山に入り、進んで有名なる滑床の勝景を探るのも宜い。



若し夫れ、宇和島の生んだ過去人物の墳墓等を訪はんとするものあらば、左記の如きは其主なるものであらう。

贈從四位	得能	亞斯登	勤王家	泰平寺
贈從五位	都築	温	勤王家	泰平寺
	藤好	南阜	藩學初代教授	泰平寺
大用國師	誠拙	和尚	出身寺	佛海寺
文學士	中野	逍遙	(重太郎)	光國寺
	末廣	鐵腸	(重恭)	大超寺
贈正四位	伊能	友鷗	政治家	大超寺
贈正五位	松根	圖書	勤王家	大隆寺
	安藤	陽州	藩學初代教授	大隆寺

新宇和島 終

宇和島町丸之内  
鶴島漁業組合聯合會

共同販賣所

電話二八四番



大正十年四月十八日印刷  
大正十年四月二十日發行

定價 金壹圓

愛媛縣宇和島町大字藥研堀二四番地

編輯者 穴 戶 忠 士

發行所 宇喜五郡重要物産共進會協賛會

愛媛縣宇和島町大字本町四丁目百〇三番地

印刷人 河 野 織 太 郎

愛媛縣宇和島町大字本町四丁目百〇三番地

印刷所 株式會社 廣 文 社

發賣所 中村惣八 杉山書林 設廣文社

# 燒酎酒精味淋製造及販賣

宇和島製產場

## 日本酒類釀造株式會社

電話 (四七番)(一一二番)

愛媛縣宇和島工場

福岡縣大里工場

全 羽犬塚工場



營業科目

活版諸種印刷  
 石版美濃印刷  
 シンク版オフセット印刷  
 洋和式帳簿書籍各種裝本  
 和洋紙文具類卸小賣  
 活字鑄造販賣  
 大阪每日新聞 大取次  
 東京諸新聞  
 シンク版、縣下手販賣

株式會社

廣文社

宇和島本町四丁目

電話三〇三番

振替大阪一七〇番

■資本金三百萬圓

■處有船舶八隻

■總噸數八千六百四十噸

■航路 歐洲航路、內地航路

(大阪四國線、宇和島線)

愛媛縣宇和島郵便局私書函第五號

宇和島町大字野新町濱通

宇和島運輸株式會社

電話 二〇〇番 重役室、文書係  
 三三〇番 營業係、庶務係  
 三三一番 船舶係、會計係、調査係

大阪市北區富島町

大阪支店 電話西(國)二二〇五番  
 一一三二番



協贊會發行







394  
55



終

